

本学の体育会に所属する学生におけるキャリア意識に関する研究

—「大学生のキャリアと就職に関する調査」結果を通して（１）—

Research on career consciousness in students belonging to the Sports Council of the University

— Through Survey “results on the employment career and college students values (1) —

次世代教育学部教育経営学科

小野 憲一

ONO, Kenichi

Department of Educational Administration

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：キャリア教育，キャリア形成支援，職業観・勤労観，アンケート調査，キャリア意識

Abstract： This study is one in which we considered the results of analysis as college students belonging to the Sports Council of the University conducted a “Survey on employment career and college students.” The awareness of student life and university education and at the time of admission. Occupation hope, professional values, working view. The awareness of career support and employment support. Awareness and action on job hunting. The study, a questionnaire survey was conducted in any awareness of employment and that the college students to work for items such as seemingly.

2 Faculty is installed in the university, the students and the next generation of the Faculty of Education and Faculty of Physical Education, to clarify whether there is a difference in career awareness with respect to employment or work in the future, the career education students athlete affiliation it is intended to be collected materials as basic data for.

Keywords： Career education, career development support, professional values, labor outlook, survey, career consciousness

1. はじめに

日本において、1999（平成11）年12月の第17期中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」の中で「キャリア教育」の用語が使用され、「キャリア教育」は、発達段階に応じて実施する必要があると述べられ、「学校教育と職業生活との接続」を図る取り組みとして小学校から高等教育に至るキャリア教育が提案され、次のように定義された。①職業観・勤労観の育成。②職業に関する知識・技能の習得。③自己理解を前提にした進路・職業選択能力の育成を目標とする教育である。

この答申を受けて文部科学省は2004（平成16）年1月に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協

力者会議」では、「戦後半世紀の教育の発展と課題を踏まえて、学校教育と職業教育の円滑な接続を図るために望ましい就労観・勤労観および職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」「一人一人のキャリア発達や個としての自立を促す視点から、従来の教育の在り方を幅広く見直し、改革していくための理念」であると定義づけ、同年6月には「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」が出され、このことを踏まえ、小学校・中学校・高等学校・大学等の教育機関において「キャリア教育」を継続的かつ縦断的に各学校教育段階において具体的な対策や方法、取り組みを発表した。この年を「キャリア元年」と呼んでいる。

わが国でも本格的に取り組むようになって、10年が経過した。しかし、現在に至っても児童生徒や学生に関して「自分の将来の仕事に対して職業観や勤労観が希薄である」と言われている。

2007（平成19）年の文部科学省の学校基本調査によると大学卒業後に進学や就職をしない学生は12.4%となっており、高等学校卒業後の若年無業者は5.2%と比較しても分かるように依然として高い数値を示している。反対に高等学校卒業後に、大学、短期大学、専門学校等に進学する割合は51.2%であり、半数以上が進学する状況の中で、大学における教育の在り方も変化せざるを得ない時期であり、大学においても学生の育成すべき資質や能力を今までの指導方法や実践では追いつかない。今までの大学の実績を整備整理し「キャリア教育」に編成しなおし、個々学生の職業観や勤労観がどのような傾向があり、入学してきた学生の実態を早期の段階で調査し、そのデータに基づいたカリキュラムや支援指導が必要になってくるといえる。大学の4年間をいかに過ごすか、長い自分自身のキャリアを考える時、その一通過点である大学において職業観や勤労観を育てる試みに関して、各大学の伝統や特質を鑑みながら実施していかなければいけないと考える。

そこで、本稿では、本学の体育会所属の学生を対象として「大学生のキャリアと就職に関する調査」のデータに基づきキャリア教育やキャリア形成支援との関係を体育学部と次世代教育学部ではその意識相違が表出されるのかを明らかにすることを試みたい。

- （1）入学時および大学教育や学生生活に関する意識。
 - （2）職業希望について。
 - （3）職業観・勤労観。
 - （4）キャリア形成支援・就職支援に関する意識。
 - （5）就職活動に関する行動や意識
- について述べることにし、キャリア教育に関わる関係機関の発表データと比較して、本学におけるキャリア教育のための基礎的データとしての資料を収集することを目的とする。

2. 本学の学部学科体制

本学は、2007（平成19）年に、2学部3学科体制（体育学部：体育学科・次世代教育学部：乳幼児学科、学級経営学科）を設置し開学した。今年で7年目を迎える。2012（平成24）年には、2学部5学科（体育学

部：体育学科、健康科学科・次世代教育学部：こども発達学科、教育経営学科、国際教育学科）体制となり、開学当初と比べても学生数も増加し、活気があふれ、学科増設と共にキャリア教育関係の講義や講座も確立されつつある。

本学では、学生自身の学業に支援援助し、きめ細かな指導でサポートを行っている。また、体育会が26部あり、活発に体育会活動をしている。そこで、体育会に所属している学生の就職意識やキャリアについてどのように考えているのか、大学で行っているキャリア関係の講義や講座・専門教育においてどのような影響があり、関連しているのかを体育学部の学生と次世代教育学部の学生との間で、意識の相違があるのかを検討していき、基礎的なデータとして提供したい。

3. 調査概要

（1）調査内容

調査内容においては、本学でのキャリア教育関係講座や講義でのキャリア支援体制や職業観や勤労観、就職活動についての項目を回答してもらった。また、質問紙の作成に関しては、就職問題研究会（代表：荻谷剛彦・東京大学大学院教授〔当時〕）が1993年、1997年、2005年に実施した内容と、桃山学院大学総合研究所共同プロジェクト「『大学生』に関する総合的研究」（代表：木下栄二）の研究成果で発表した岩田孝准教授が2008年に実施した内容を参考にしている。

主な調査項目は以下のようになっている。

- ①所属（所属学部学科、性別、年齢、学年、居住地、所属クラブ・サークル、両親の学歴など）
- ②大学教育・生活（大学入学理由、大学での成績、大学の授業での取組み、その経験から身に付けた能力など）
- ③職業希望（希望職業の明確度、希望職業の決定に影響要因など）
- ④職業観・勤労観（働く目的、理想の職場、職業に関する適性把握、離職に関する意識など）
- ⑤キャリア形成や就職支援に関する意識（利用度、有用度、満足度、要望など）
- ⑥就職活動（開始時期、活動量、満足度、内定数、内定時期、内定先関係事項など）
- ⑦社会・生活意識（社会的スキル、格差についての意識、性別役割観など）

（２）調査の時期・対象・方法

調査時期に関しては、後期授業が開始されてから後の10月からにした。体育会所属部員は、それぞれの競技において、世界大会や全国大会に向けて練習し、他大学との練習試合があり、活動が活発になる時期でもあるため調査人数の確保がしやすい。

①調査時期：2013（平成25）年10月～11月

②調査対象：本学体育会所属学生の1年生から4年生

③調査方法：各所属している体育会の部長、監督を通し、部活動中の所属学生を対象として、アンケート質問紙（自記式、無記名式の調査用紙〈A4版裏表〉）を用い集合調査を行った。

（３）回収数と回答者の基本属性

調査票の回収数は、合計で425票であった。また回収率は92.9%で、有効な回答数として395票であった。

男性259名、女性136名、学年別では、1年生182名、2年生93名、3年生64名、4年生56名となっている。詳細は《表1》を参照されたい。

４．結果

（１）入学時および大学生活に関する意識

①在籍学部を選択理由

本学の入学試験制度は、色々な受験の仕方があり、能力や学部学科別にて入学試験が実施されている。どのくらいの学力の学生が、どのような入試制度や方法を利用して、自分が行きたいと考えている大学を受験し、学科を選択したりしているのか、調査した結果を分析することにより、その傾向と特徴が表出されてくると考える。

表2は、大学に入学する際に現在在籍している学部

をどのように選択したのかその理由を回答してもらったものを示している。体育学部において最も多い回答は、「将来の進路のため」が67.3%であり、次いで「専攻したい学問・研究だったから」が12.1%であり、「クラブの顧問のすすめ」6.5%、「先生（進路指導）のすすめ」が4.6%となっている。体育学部では、高校時代の体育を大学に入学してクラブ活動に従事することによって、将来は体育に関わるスポーツ関係の仕事に就きたい（体育教員、スポーツインストラクター、柔道整復師、消防士・警察官など）の目的意識が入学するときから明確化されていると考えられる。

また、次世代教育学部のデータを見てみると、今までの実績を基にした、将来学校の教員になりたいと考えて本学を志望した学生が大半であるため、「将来の進路のため」52.0%、「専攻したい学問・研究だったから」16.3%となっている。体育学部と同じく「クラブ顧問のすすめ」が8.8%、「先生（進路指導）のすすめ」5.0%になっている。また、次世代学部では「友人・先輩のすすめ」が3.1%の結果となっているが、これは、自分の身近な存在である卒業生や友人から情報を得て、本学で「教員を目指すなら」すすめると考えられる。こういったことから、本学において体育学部と次世代教育学部とともに将来の明確な就職先の職種があるため、特化していると考えられる。しかしながら、調査項目の「何となく」と回答したのには、どのような意味をなしているか今後の追及課題となると考えられる。

②大学の授業に対する期待

表3は、本学の大学の授業に対する期待度を回答してもらった表である。体育学部では「将来の職業で役立つ知識や技能」が39.6%であり、次いで「専門的な知識や技能」が33.5%、「幅広い知識やものの見方」

表1 基本属性別回答者数（人）

学部	学科	学年				性 別		合計	総合計
						女性	男性		
体育学	体育	1年生	2年生	3年生	4年生	56	132	199	395
	188	182	6	0	0				
	健康科学科	1年生	2年生	3年生	4年生	0	11		
199	11	0	11	0	0				
次世代教育学	教育経営	1年生	2年生	3年生	4年生	59	84	196	
	143	0	76	57	10				
	こども発達	1年生	2年生	3年生	4年生	21	32		
196	53	0	0	7	46				
合計		182	93	64	56	136	259	395	395

16.6%であった。また次世代教育部では「専門的な知識や技能」が36.2%であり、「将来の職業で役立つ知識や技能」が31.1%であり、「幅広い知識やものの見方」が18.9%であった。

両学部とも同じ項目にて回答を寄せている。

③大学時代に力を入れた活動

学生生活を送る上において、大学内、大学外において高校時代とは格段にその範囲が広くなり、活動場所も広範囲になる。そのような状況で学生は何に力を入れているのか、どのようなことに熱心に取り組んで活動しているのか、まずは、大学である「専門科目の勉強・研究」において「非常に熱心」「ある程度熱心」「あまり熱心ではない」「まったく熱心ではない」の4件法で回答してもらった。表4は、その結果「非常に

熱心」「ある程度熱心」を合わせると体育学部の学生は、82.9%であり次世代教育学部の学生は、85.8%の学生が「熱心」に取り組んでいることが伺える。

反対に、「あまり熱心ではない」「まったく熱心ではない」を回答した学生は、体育学部で17.1%、次世代教育学部では14.5%という値になっている。

両学部とも「興味をもてないから」の項目を回答した学生が体育学部では79.4%、次世代教育学部では58.8%となっている。次いで「将来の進路につながらないから」が体育学部17.7%、次世代教育学部23.5%となった。これは、データをもっと詳しく分析して見る必要がある。入学意志が明確である学生が、色々な影響をうけ、その結果熱心に取り組むことができなくなったのかなど、考えられる。

また、専門科目の勉強・研究以外の項目に対して

表2 在籍学部の選択理由（%）

学部	学科	在籍学部の選択理由														合計
		専攻したい学問・研究だったから	将来の進路のため	学カレレベルがあつたから	学部就職状況が良かったため	オープンキャンパスに参加して	入試説明会に参加して	まわりの友だちが行くから	家族のすすめ	友人・先輩のすすめ	恋人のすすめ	先生(担任・進路指導)のすすめ	クラブ顧問のすすめ	何となく	その他	
体育学	体育	12.2%	68.7%	2.1%	1.1%	2.1%	0.0%	0.0%	0.5%	0.5%	0.0%	4.3%	6.4%	2.1%	0.0%	100% (188)
	健康科学	9.1%	45.4%	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%	9.1%	18.2%	0.0%	100% (11)
	体育学部	12.1%	67.3%	2.0%	1.5%	2.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.5%	0.0%	4.6%	6.5%	3.0%	0.0%	100% (199)
次世代教育学	教育経営	18.9%	51.0%	0.7%	0.0%	0.7%	1.4%	0.0%	2.8%	3.5%	0.0%	4.9%	6.3%	9.8%	0.0%	100% (143)
	こども発達	9.4%	54.7%	1.9%	0.0%	1.9%	1.9%	0.0%	0.0%	1.9%	0.0%	3.8%	15.1%	9.4%	0.0%	100% (53)
	次世代教育学部	16.3%	52.0%	1.0%	0.0%	0.5%	1.5%	0.0%	2.0%	3.1%	0.0%	5.0%	8.8%	9.8%	0.0%	100% (196)

表3 大学の授業に対する期待度（%）

学部	学科	大学の授業で最も学びたいこと						合計
		幅広い知識やものの見方	専門的な知識や技能	何かを学ぶ際に基礎となる力（問題を発見する力・分析的に考える力・論理的に文章を書く力など）	将来の職業で役立つ知識や技能	コミュニケーション能力	その他	
体育学	体育	17.1%	30.3%	6.4%	41.4%	4.8%	0.0%	100% (188)
	健康科学	9.1%	63.6%	0.0%	9.1%	18.2%	0.0%	100% (11)
	体育学部	16.6%	33.5%	6.3%	39.6%	5.8%	0.0%	100% (199)
次世代教育学	教育経営	18.9%	35.6%	7.0%	31.5%	7.0%	0.0%	100% (143)
	こども発達	18.9%	37.7%	9.4%	30.2%	3.8%	0.0%	100% (53)
	次世代教育学部	18.9%	36.2%	7.7%	31.1%	6.1%	0.0%	100% (196)

表4 専門科目の勉強・研究に熱心に取り組んできた理由（%／人）

学部	学科	専門科目の勉強・研究に熱心に取り組んできた理由							合計
		将来の進路のため	資格習得のため	社会に出て役立つ ちそうだから	興味をもてたから	専門的な知識や 技能が身につく から	その他		
体 育	体 育	66.4% 105	19.6% 31	1.9% 3	8.9% 14	3.2% 5	0% 0	100% 158	
	健康科学	85.7% 6	14.3% 1	0% 0	0% 0	0% 0	0% 0	100% 7	
	体育学部	67.3% 111	19.4% 32	1.8% 3	8.5% 14	3.0% 5	0% 0	100% 165	
次世代教育	教育経営	50.9% 54	31.1% 33	5.7% 6	7.6% 8	4.7% 5	0% 0	100% 106	
	こども発達	35.9% 14	35.9% 14	7.7% 3	15.4% 6	5.1% 2	0% 0	100% 39	
	次世代教育学部	46.9% 68	32.4% 47	6.2% 9	9.7% 14	4.8% 7	0% 0	100% 145	

「非常に熱心」「ある程度熱心」「あまり熱心ではない」「まったく熱心ではない」「していない・つきあいが無い」の5件法で回答してもらった。その結果が下記の図1-1から図1-9である。

この結果によると、本学では体育会活動が盛んであ

る象徴であるため「クラブ・サークル活動」が圧倒的に高く60.2%となっている。反対に「自主的な勉強会」においては10.1%であり、学習に関しては全体的に活発的ではないと言える。しかし3年生から4年生には教員になるための勉強会、公務員になるための勉

表5 専門科目の勉強・研究に熱心に取り組んでこなかった理由(%/人)

学部	学科	専門科目の勉強・研究に熱心に取り組んでこなかった理由						合計
		将来の進路につながらないから	資格習得できないから	社会に出て役立つから	興味をもてないから	専門的な知識や技能が身につかないから	その他	
体育学	体育	20.0% 6	0% 0	0% 0	76.7% 23	3.3% 1	0% 0	100% 30
	健康科学	0% 0	0% 0	0% 0	100% 4	0% 0	0% 0	100% 4
	体育学部	17.7% 6	0% 0	0% 0	79.4% 27	2.9% 1	0% 0	100% 34
次世代教育	教育経営	21.6% 8	5.4% 2	0% 0	64.9% 24	8.1% 3	0% 0	100% 37
	こども発達	28.6% 4	14.3% 2	0% 0	42.8% 6	14.3% 2	0% 0	100% 14
	次世代教育学部	23.5% 12	7.9% 4	0% 0	58.8% 30	9.8% 5	0% 0	100% 51

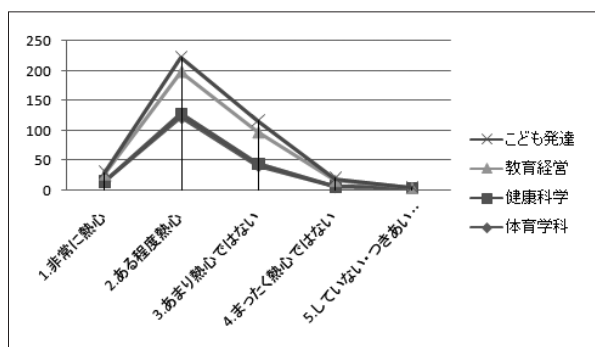


図1-1 一般教養の講義・勉強

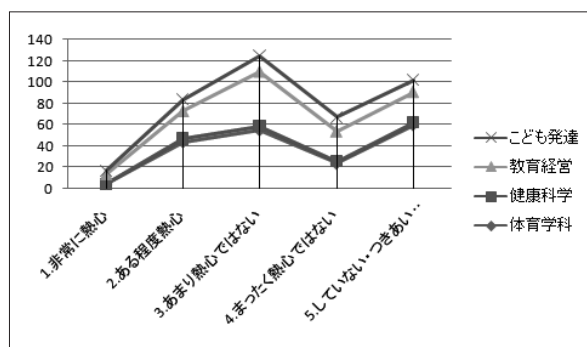


図1-4 自主的な勉強会

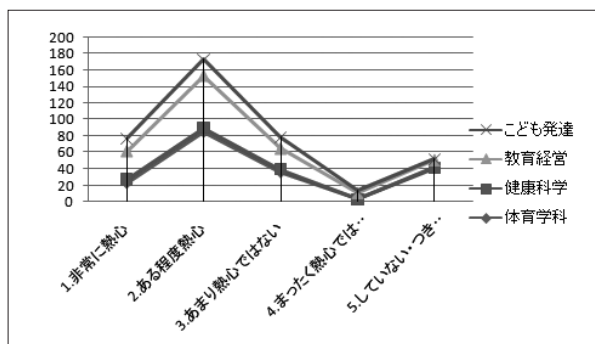


図1-2 実習・実験

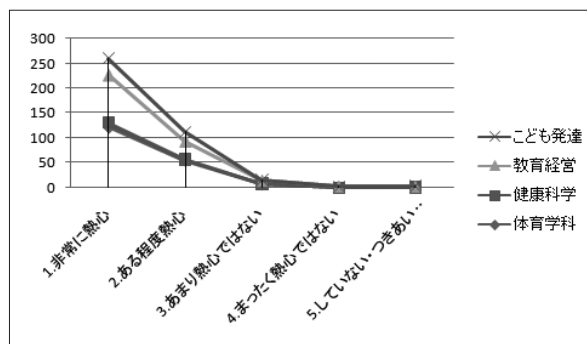


図1-5 クラブ・サークル活動

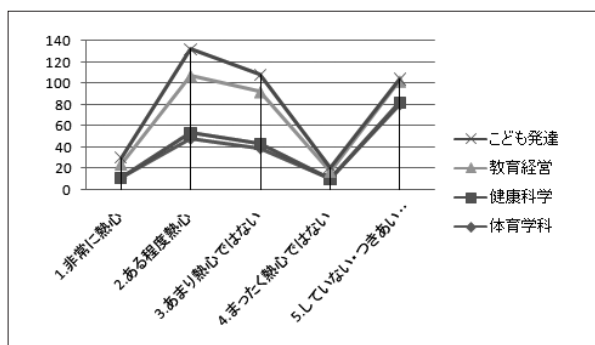


図1-3 ゼミ・卒業研究

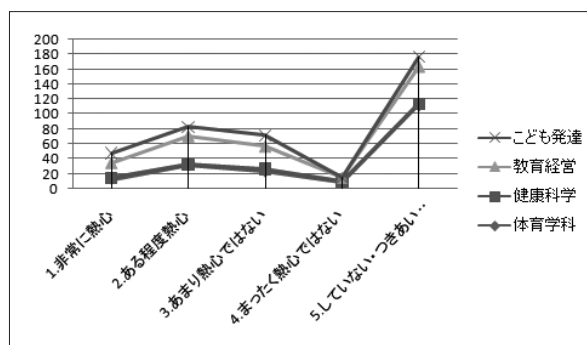


図1-6 アルバイト

強会などの講義や勉強会があるため、その度合いが大きくなっている。

④大学での経験を通じて身につけた力

先に述べた大学時代に熱心に取り組んできた結果、どのような能力を自分自身が身につけたかを回答してもらった。その能力は下記の5つに依った。

- ①積極性：自ら進んで意見を発信したり，行動する力
- ②協調性：自分のまわりのひとたちと協力する力
- ③統率力：周りの人たちを引っ張っていく力
- ④独創性：新しいモノやアイデアを生み出す力
- ⑤責任感：責任をもって行動する力である。

下記の図2-1～図2-10それぞれの項目でどの力

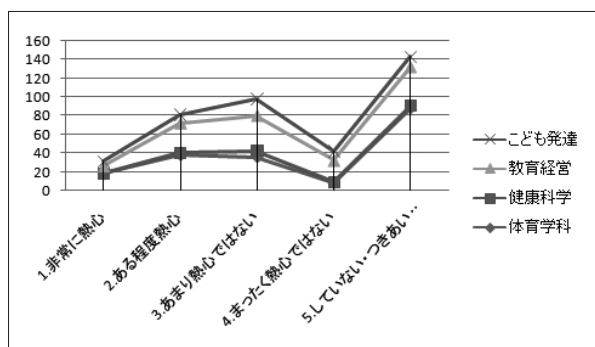


図1-7 ボランティア

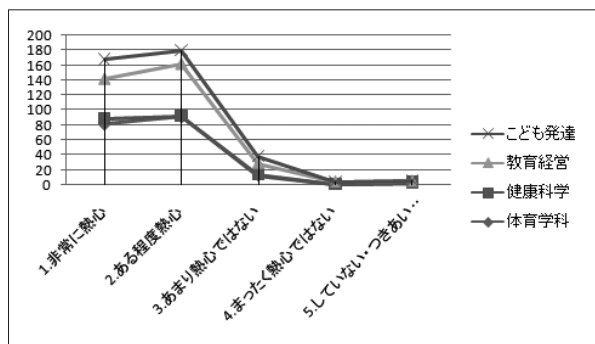


図1-8 友人とのつきあい

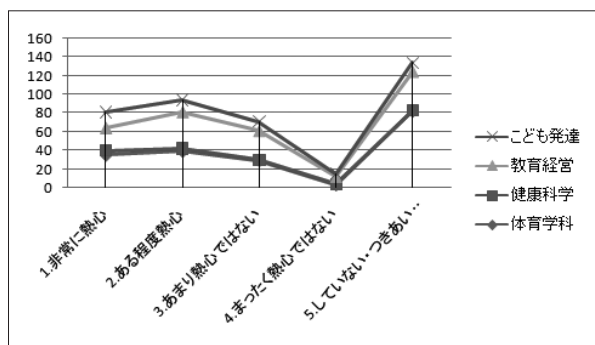


図1-9 恋人とのつきあい

が最もついたかと認識している図である。図2-1の「一般教養の講義・勉強」では体育学部，次世代教育学部とも「積極性」「協調性」の力がついたと回答している。

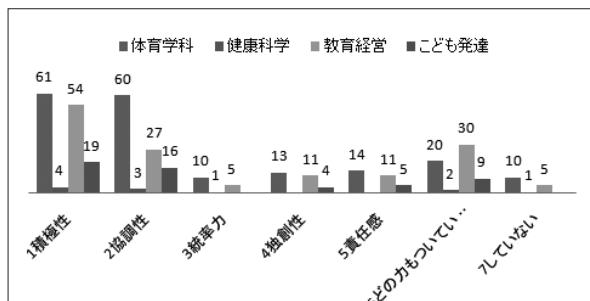


図2-1 一般教養の講義・勉強

「専門科目の講義・勉強」でも、「一般教養の講義・勉強」と同じように「積極性」「協調性」の力がついたと回答している。

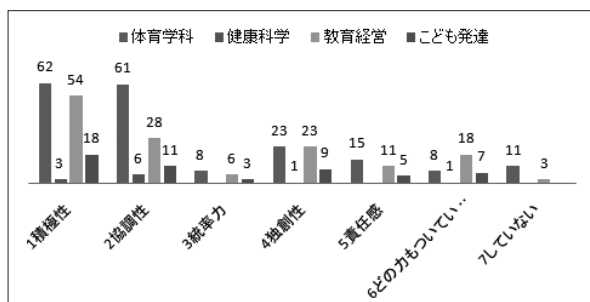


図2-2 専門科目の講義・勉強

「ゼミ・卒業研究」では、「協調性」の力がついたと回答している学生が多く，反面「していない」という学生の値が高かったが，これはなぜこのような回答になったのか分析してみなければ分からない。

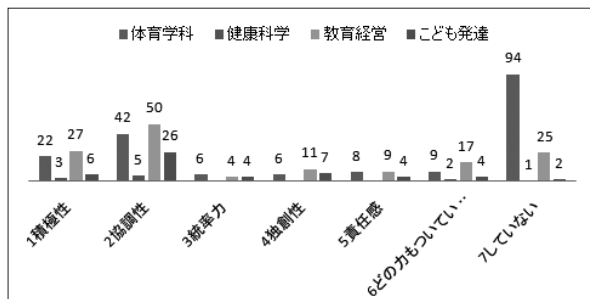


図2-3 ゼミ・卒業研究

「キャリア教育科目」では、「積極性」「協調性」の力がついたと回答している学生も多いが，「していない」と回答している学生も多かった。

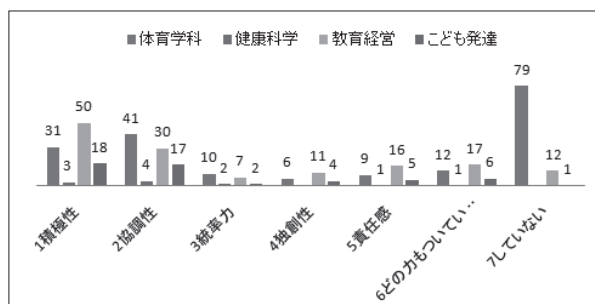


図2-4 キャリア教育科目

「就職対策講座」でも「キャリア教育科目」と同じような傾向であった。

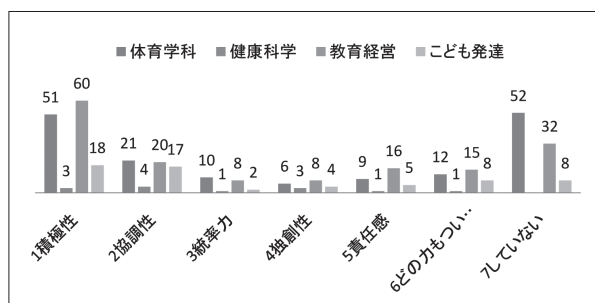


図2-5 就職対策講座

「クラブ・サークル活動」では、「協調性」の力がついたと回答してくれた学生が最も多く、次いで「積極性」となり「責任感」がついたと回答してくれている学生が多かった。クラブやサークルのなか

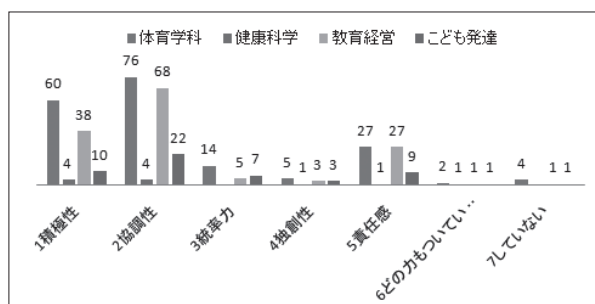


図2-6 クラブ・サークル活動

「アルバイト」では、

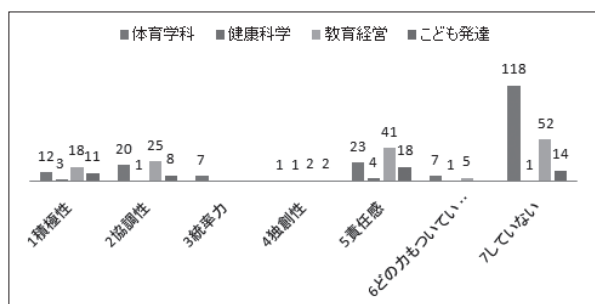


図2-7 アルバイト

「ボランティア活動」では、

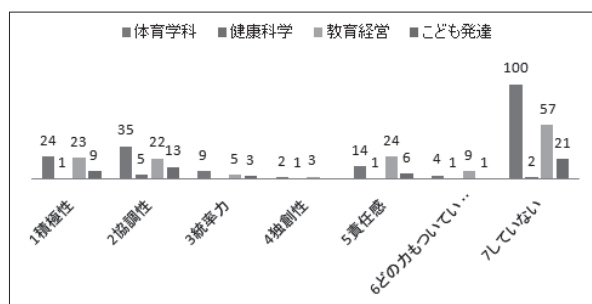


図2-8 ボランティア活動

「友人とのつきあい」では、

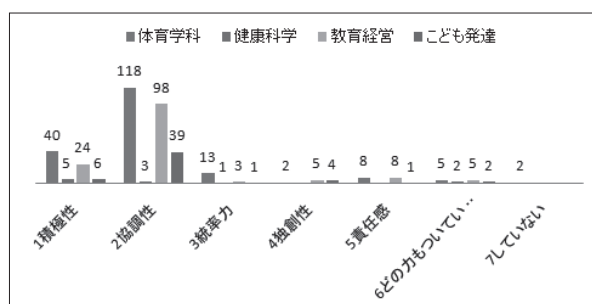


図2-9 友人とのつきあい

「恋人とのつきあい」では、

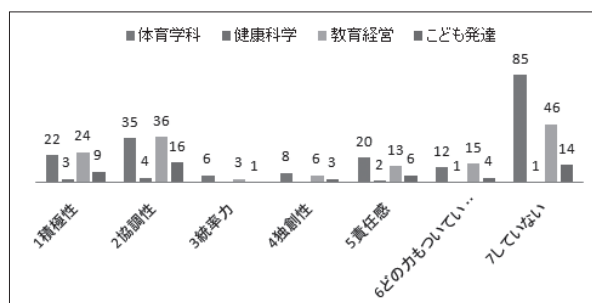


図2-10 恋人とのつきあい

(2) 将来就きたい職業

入学時と入学してから、将来就きたいと考えていた意識の変化をたずねたものである。

①大学入学時の職業希望の明確度

表6-1は、大学に入学した時、将来就きたい職業があったかどうかを回答してもらった。体育学部では「はっきりあった」が55.2%、「なんとなくあった」32.1%であり、「なかった」が12.8%であった。また、次世代教育学部では「はっきりあった」が42.3%、「なんとなくあった」が43.9%、「なかった」が13.6%であった。両学部とも「はっきりあった」「なんとなくあった」を合わせると体育学部92.0%、次世代教育学

部86.2%で、入学時には大学に入る目的意識がはっきりしていたことが明確にわかる。

また、表6－2は、「はっきりあった」「なんとなくあった」を回答してもらった学生が、将来なりたいと思っている職業に対して現在「その職業に就きたい」「他の職業に就きたい」「現在就きたい職業はない」で回答してもらったものである。

「その職業に就きたい」の項目では、体育学部は、71.0%、次世代教育学部で、58.0%となっており、依然、自分の目標とした職業に就きたいことが分かる。また、入学当初とは違い「他の職業に就きたい」と回答した学生は、体育学部16.4%、次世代教育学部25.4%となっている。そして「現在就きたい職業はない」と

回答した学生は、体育学部12.6%、次世代教育学部16.6%となっている。

②現在の職業希望の明確度

表7－1は、現在、学生が就きたい職業はあるかないを回答してもらった。全体で80%以上の学生が、将来就きたい職業があると回答していることがわかる。

そして、表7－2では、就きたいと考えている学生が、いつ頃から就きたいと考えはじめた時期を回答してもらっている。それによると「大学入学前」が圧倒的に多い。これも入学前から本校に入学し、将来の職業に対して明確な意志を示していることが分かる。

表6－1 入学時に将来就きたい職業があったか（%／人）

学部	学科	大学入学時の将来就きたい職業						合計	
		はっきりあった		なんとなくあった		なかった			
体育学	体育	64.9%	122	27.7%	52	7.4%	14	100%	188
	健康科学	45.4%	5	36.4%	4	18.2%	2	100%	11
次世代教育学	教育経営	45.5%	65	40.6%	58	13.9%	20	100%	143
	こども発達	39.6%	21	47.2%	25	13.2%	7	100%	53
合計		53.9%	213	35.2%	139	10.9%	43	100%	395

表6－2 入学時の希望職業の変化（%／人）

学部	学科	現在までの変化						合計	
		その職業に就きたい		他の職業に就きたい		現在就きたい職業はない			
体育学	体育	71.3%	124	15.5%	27	13.2%	23	100%	174
	健康科学	66.7%	6	33.3%	3	0%	0	100%	9
次世代教育学	教育経営	59.3%	73	23.6%	29	17.1%	21	100%	123
	こども発達	54.4%	25	30.4%	14	15.2%	7	100%	46
合計		64.8%	228	20.7%	73	14.5%	51	100%	352

表7－1 現在就きたい職業はあるか（%／人）

学部	学科	現在の将来就きたい職業							
		はっきりある		なんとなくある		ない		合計	
体育学	体育	77.1%	145	8.5%	16	14.4%	27	100%	188
	健康科学	54.5%	6	27.3%	3	18.2%	2	100%	11
次世代教育学	教育経営	56.6%	81	23.1%	33	20.3%	29	100%	143
	こども発達	47.2%	25	35.8%	19	17.0%	9	100%	53
合計		65.0%	257	18.0%	71	17.0%	67	100%	395

表7－2 その職業に就きたいと思った時期（%／人）

学部	学科	職業に就きたいと思った時期								合計			
		大学入学前	大学1年の時	大学2年の時	大学3年の時	大学4年以降							
体育学	体育	70.9%	114	9.3%	15	6.2%	10	6.8%	11	6.8%	11	100%	161
	健康科学	66.7%	6	33.3%	3	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	100%	9
次世代教育学	教育経営	51.8%	59	12.3%	14	16.7%	19	9.6%	11	9.6%	11	100%	114
	こども発達	40.9%	18	15.9%	7	11.4%	5	20.4%	9	11.4%	5	100%	44
合計		60.0%	197	12.0%	39	10.4%	34	9.4%	31	8.2%	27	100%	328

③希望職業の決定に影響を与えた要因

項目は、次の通りである。

- ①高校までの勉強
- ②専門科目の講義・勉強
- ③ゼミ・卒業研究
- ④他学部での講義・勉強
- ⑤キャリア教育科目
- ⑥就職対策講座
- ⑦ボランティア活動
- ⑧クラブ・サークル活動
- ⑨留学
- ⑩アルバイト
- ⑪インターンシップ
- ⑫就職活動
- ⑬趣味・習い事
- ⑭家族や先輩など身近な人の話や働く姿
- ⑮街などで出会った人の話や働く姿
- (⑭は除く)
- ⑯テレビ・映画・本に出てくる人の話や働く姿

の16項目である。

本学の体育会所属の学生を対象にして、自分が就きたいと思うようになった際に、各項目がどのくらい影

響したかという質問であった。体育会所属部員に調査を行った。学生には「かなり影響した」「まあ影響した」「ほとんど影響しなかった」「まったく影響しなかった」「していない・つきあっていない・あてはまらない」の5件法で回答してもらった。その中で「かなり影響した」「まあ影響した」を選択した学生の回答が図3である。体育会所属部員だけあって、「⑧クラブ・サークル活動」に影響されたが、体育学部で74.4%，次世代教育学部では73.5%となっている。高校でのクラブ活動やそれ以外のクラブチームに所属して活動してきた学生が多くいるためと考えられる。

次に「家族や先輩など身近な人の話や働く姿」では体育学部73.9%，次世代教育学部が71.4%で全体の割合が高い。家族や先輩など身近な人によって本学の情報（入学情報や就職状況など）を提供してくれたことに原因が大いに関係していると考えられる。

また「専門科目の講義・勉強」では、体育学部56.3%，次世代教育学部が61.7%であった。高校では体育学科や体育コースといった専門課程に所属し、そこでの講義や勉強といった学習による影響が強いと考えられる。

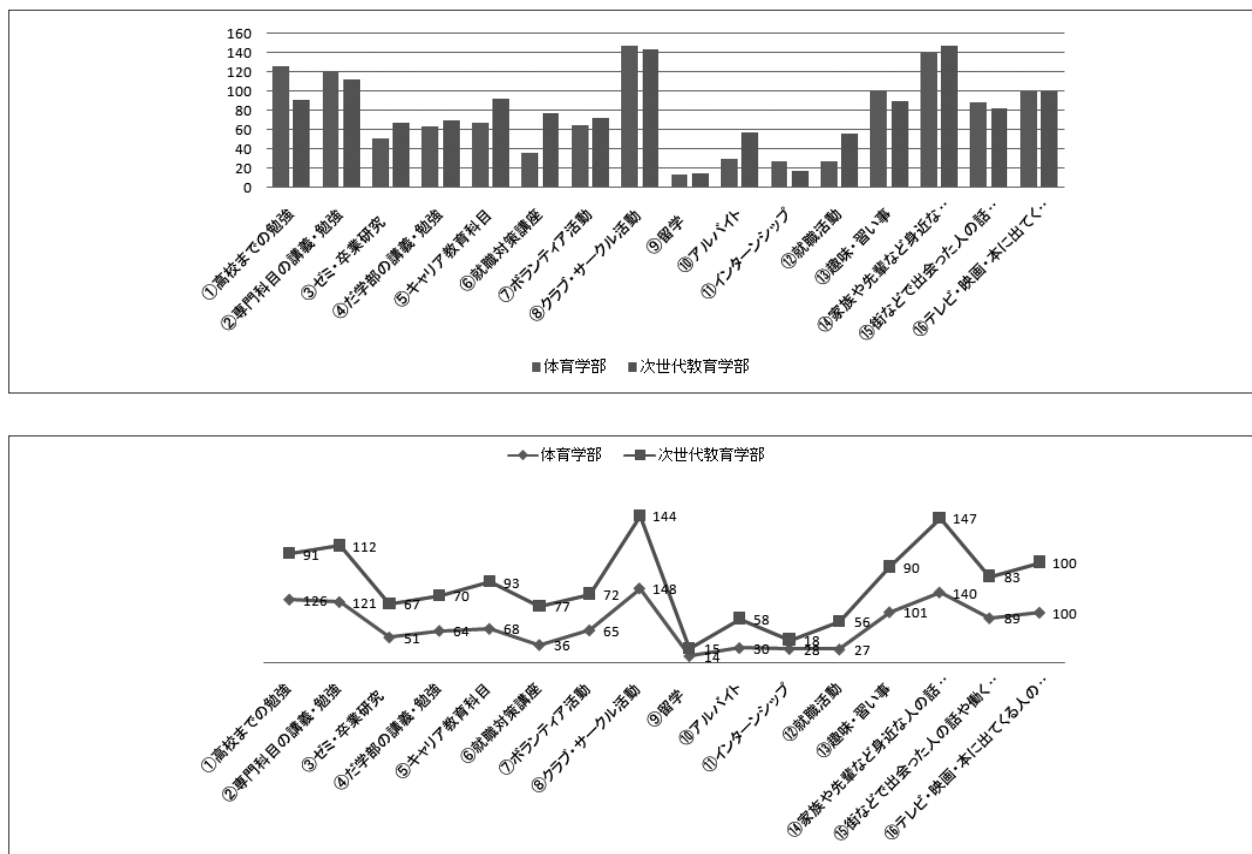


図3 希望職業の決定に影響を与えた要因

5. おわりに

今回は、(1) 入学時および大学教育や学生生活に関する意識と(2) 職業希望について考察をした。

入学時において本学の学生は、入学以前に将来の職業を予め決定して、入学してくる学生が多い。中国地区の私立大学で中高体育の教員免許状が習得できる大学、また、小学校教諭免許状も習得できる大学である。また、大学の体育会監督、コーチと高校のクラブ顧問とのつながりによる大学選択、将来の進路に大いに関係があると言えよう。大学の授業においては、将来の職業で役立つ知識や技術、専門的な知識や技能を最も学びたい要因としてあげている。また、将来の進路のため、資格習得のために熱心に取り組んできたと回答している学生が多く見受けられる。

職業希望にたいしては、入学時に将来就きたい職業があったと回答した学生が90.0%を超える人数であった。またその中で、現在もその職業に就きたいと考えている学生は、80.0%を超える人数であった。入学時よりの本学志望の意志の強さが表れているものだと考えられる。

また、入学して学生生活を送る上で、多少の進路変更等もありうると考えられるが、85.0%以上の学生が、現在就きたい職業があると明確な回答をしている。そしてそう思った時期については、入学前と大学1年の時を合わせると69.3%以上の学生が、早期段階にて将来の職業に対して就きたいと考えていることが分かった。

このような結果から、本学に入学してくる学生に対して、自分なりの将来への職業に関しての意志は強いものと考えられる。しかしながら、そうではない学生に対しての講義や授業、キャリア教育関係の講義、キャリアセンターなどの運用を考えていかなければならないと考えられる。また、このように意志が強い学生が、就職活動が迫り、それに対しての心構えや準備(一般企業・公務員・教員など)ができず、折れてしまった学生に対するホローも併せて考えていかなければならない。

次回は、(3) 労働観・職業観、(4) キャリア形成支援・就職支援に関する意識、(5) 就職活動に関する行動や意識について述べたいと考えている。

引用・参考文献

安保英勇・石津憲一郎・菊池武剋・千葉政典・猪股歳之 2008 「東北大学における学部学生のキャリア意識(1)－希望進路に関わる要因とその準備活

動－」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第56集・第2号

濱中義隆 2007a 「現代大学生の就職活動プロセス」労働政策研究・研修機構編『大学生と就職－職業への移行支援人材育成の視点からの検討』(労働政策研究報告書 No.78) 労働政策研究・研修機構

濱中義隆 2007b 「現代大学生の就職活動プロセス」小杉礼子編『大学生の就職とキャリア－「普通」の就活・個別の支援』到草書房

岩田考 2012 「私立大学における専門教育とキャリア形成支援(1)－4大学の学生調査の比較分析－」『桃山学院大学総合研究所紀要』Vol.37, No.3

岩田考 2010 「進路未定とフリーター」中村高康編『進路選択の過程と構造－高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房

荻谷剛彦 1995 『大学から職業へ－大学生の就職活動と格差形成に関する調査研究－』(高等教育研究書31) 広島大学教育研究センター

荻谷剛彦・本田由紀 2010 『大卒就職の社会学－データからみる変化』東京大学出版会

木下栄二 2011 「新入生実態アンケート調査の分析(1)－「フェイス」および「大学(本学)の選択理由・入学後期待等」『桃山学院大学総合研究所紀要』36(2)

那須幸雄 2004 「わが国大学におけるキャリア教育の現状と動向－中部、関西、九州の代表的9大学に見る事例研究－」『文教大学国際学部紀要』第15集・1号

清川雪彦・山根弘子 2004 「日本人の労働観－意識調査にみるその変遷」『大原社会問題研究雑誌』No.542

松繁寿和編 2004 『大学教育効果の実証分析－ある国立大学卒業生たちのその後－』日本評論社

小方直幸 1998 「大卒者の就職と初期キャリアに関する実証的研究－大学教育の職業的リレバンス－」『広島大学大学院 社会学科研究科国際社会論専攻 比較高等教育研究 博士論文シリーズ』(No.1) 広島大学教育研究センター

小方直幸 2006 「大学教育と労働市場の研究－回顧と展望－」『大学論集』(第36集) 広島大学高等教育開発センター

小野憲一 2012 「環太平洋大学の学生におけるキャリア意識の一考察－職業観に関するアンケート調査の結果を通して(1)－」『環太平洋大学研究紀要』第6号

労働政策研究・研修機構編 2007 『大学生と就職－
職業への移行支援と人材育成の視点からの検討』
(労働政策研究報告書 No.78) 労働政策研究・研修
機構